
CLOVER

双葉 藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CLOVER

【Zコード】

N4160A

【作者名】

双葉 藍

【あらすじ】

未来の見える少女と病弱だが心の優しい少年、そして彼の幼馴染の夢を追い駆け続いている少年が主人公の心温まる(?)少し恋愛も絡めた(ー?)ほのぼのストーリー・・・を目指します!

プロローグ 涙と笑えば

四葉のクローバーは本当に幸せを運んでくれますか？

雨が窓を叩く音が聞こえる。ジメジメするしぶとべとするし、だからこの時期の雨は嫌いだ。だが彼はわざわざこの家に来た。どんな理由かは・・・少し見当がつく。

「俺、もうすぐ・・・死ぬんだろ？」

やつぱり・・・

「・・・」

「いや、俺だってこんな話したくねえよ。でも・・・お前には・・・」

雨足が強くなり、窓を叩く音が大きくなる。

「ええ。確かにあなたはもうすぐ死ぬわ。私の未来予知能力に、狂いは無いから・・・」

ここまでこの能力に嫌悪感を覚えたのは、今が初めてだった。それにこんなことを歯に衣着せぬ言つ私を、彼らは今までどう思つて來たのだろう？と思つとホントに自分が嫌になる。

「・・・ごめんな。あんなこと言わせて。本当は言わないって約束してたのに。破らせちまつたな。ホント・・・ごめん」

そう言つて温かく私のことを抱きしめる彼がとても愛しい。謝りたいのも、感謝したいのも私だって同じなのに・・・先に言われてしまつた。だから私も抱きしめ返した。彼がここにいるということを、この事実を、しっかりと心に焼き付けたいから。

「『』・・・ごめんなさい・・・」

雨の音がどんどん弱くなる。早く晴れてまた暑い日差しが降り注げばいいのに。

「何泣いてんだよ？そんな哀しむことじやねえって」

・・・私が泣いてる？そんな・・・泣きたいのは彼の方だろうに。勝手に未来を見て、それを告げて・・・終わり。何て私は無力で、身

勝手なのだろう・・・こんな能力さえ無ければ、誰も辛い思いはしなかつたのに・・・

「じゃあ俺は帰るからな。いつまでもメソメソしてんじゃねえぞ」無理して笑っているのがありありと分かる。笑顔がとても綺麗な彼を変えてしまったのはきっと私。

「あつ、そうだ！ アイツには絶対言うなよ！ 心配しすぎて向こうが倒れかねないからな」

と念を押されてしまった。私と彼どがした初めての約束。もう７年も一緒にいるのに、初めての約束がこんなことだなんて虚しすぎるけど・・・少し嬉しい。

「分かったわ。じゃあ指切りね」

ハイッと小指を差し出す。彼のポカーンとした顔がとても面白い。珍しく私が子供っぽいことを言つたからだろう。

「・・・そうだな」

そして指切りをして帰ろうとするときには虹が

神様がこの虹を架けてくれたのかもよと言つと、彼は片方の口角だけを上げてニヤッと笑つた。

「そんな小糸なことを神様がするもんかな？ きっと・・・四葉のクローバーが、少しの幸せ気分を運んでくれたんじやん？」

そう言つて私のピアスに軽くキスをし、赤くなつている私を他所に笑いながら帰つて行つた。

わざと水溜りに足を入れたりして、子供っぽい行動をとる彼が7年前のあの日と重なつて見える。

そう私が私になれたあの日に

プロローグ 涼と笑えば（後書き）

初投稿作品です。いろいろおかしな部分もあるかもしませんが、あまり気にしないで下さって。これからはもっと明るくあるつもりなので楽しんで頂ければ幸いです。

大切な人と一緒だと幸せなのですか？

お線香の香りと時折吹いてくるヒヤツとする風で私は夢から覚めた。こんな時に何で未来の事なんかが見えたのだろう。今が一番大変な時なのに・・・しかも覚えているのは、知らない男の子と晴れ渡つた空と・・・

「大丈夫？気分悪いの？波香ちゃん」

隣に座つていた伯母さんが声を掛けてくれた。

「あっ、いえ・・・大丈夫です。すこし貧血っぽいだけなんで」

「そうなの・・・もう少しで終わるだろ？から、もうちょっと我慢してね」

そう二コッヒ笑いながら伯母さんは言った。
「この前の日曜日、私の両親は死んだ。

「波香も大きくなつたし、一人で留守番だつて出来るよね？」

母が突然そんな事を言うもんだから何事かと思つた。だが

「明日はお母さんとお父さんの結婚記念日なの。だから一人で旅行したいな～なんて思つたんだけど・・・良い？」

とこつちの心配をよそに母はこんな事を言つてのけた。たとえダメといつても行くんだろうから、仕方なくOKした。

「まったく・・・いつまで新婚気分でいるつもり？」

呆れてしまつたので一応聞いてみた。すると母はフフツと小さく笑つてから

「死ぬまでよ。だつて結婚つて大切な人とずっと一緒にいられるつことよ？「レの以上の幸せなんて無いわ。お母さんはお父さんと一緒にいられてホント幸せだわ～」

そして鼻唄交じりに荷造りを始めた。だがその夜の夢でうつかり見

てしまつたのだ。母の未来を・・・急に目の前でバスが崖から落ちていく映像がなんて、非現実過ぎて信じられないから、てっきり映画か何かの1シーンが夢に出てきたのだと思った。でもそれが本当に未来のことだつたなんて・・・何せ一人が帰りに乗つたバスが、本当に転落事故を起こしたのだから。一人とも打ち所・・・というより座つた所が悪かつたのか、すぐに息を引き取つたらしい。

まさか一瞬にして一人の大切な人を亡くすなんて・・・一応知つていたといえばそうだが、自分だつて信じられなかつたのだから結局、意味はない。自分がこんな目に遭うなんて思つてもみなかつたし。

願つたつて一人が帰つてくる訳じやないんだからとは思うが、出来ることなら、もう一度だけ会つて・・・幸せな人生だつたかを聞きたい。でも本当に大切な人と一緒だつたからきっと幸せだつたんだろうなあ。

時間がいつの間にか経つついて、今はもう葬式の後の昼食タイムになつてゐた。私は部屋の隅つこでボーッとしていたが、やはり居心地が悪く、トイレで時間を潰して帰る頃になつたらまた出てこようと思い、しばらくトイレに閉じ籠つていた。すると急に眠気が襲つてきてしばらくの間眠つてしまつた。ざわざわと人の話し声が聞こえてきて、私は慌てて起きた。

「・・・波香ちゃん・・・・」

と私の名前が聞こえてきたので、もしかしたら中々トイレから出でこない私を心配しているのかもと思い、出て行こうとしたが

「誰が引き取るの？」

全くの逆だつた。私の事なんてちつとも心配していなかつた。しているのは自分達の心配。

「私のところは無理よ。育ち盛りの息子が3人もいるんだもの。あなたは？」

「すみません、お姉さん。うちだつてやつと上の子が小学校に上が

つたんですよ」

その後もみんなで私の事を押し付け合っている。でも最後にさつき声をかけてくれた伯母さんが始めて口を挟んだ。

「もう。みんなしようがないわねえ」

やつぱりこの人は良い人だと思った。さすが母のお姉さんとまで思つた。が、

「だつたら何処かに預かってもらいましょうか？」

むやみに希望を持つと逆だつた時のショックは・・・相當なものとなる。

「そうですよね～アハハハハハハハハ

悔しくて涙も出て来ないし、耳を劈くような酷い笑い声に気分も悪くなつてきた。どうして不幸がこんなに一編にやつてくるのだろう・

・
この時、私はもう一度と幸せになつてはいけないと、確信した。

オバサン達が全員居なくなつてから私はゆっくりとトイレを出た。部屋に戻つてアノ人達の顔を見るのは嫌だつたけど、帰らねばもつと迷惑がかかると思いトボトボと戻つていた。すると部屋の中から大声が聞こえてきた。何事かと思い、走つて行つてドアを開けると、

「・・・壁？」

と見紛うぐらい目の前に真つ黒いコートを着た外国人張りの背の高さの人が佇んでいた。

「ん？・・あ～！！！！！」

最初は背が高すぎたのか私の事に気付かなかつたみたいけど、見つけた途端に人の事を指さして大声で叫んだ。

「君が波香君か！－いやあ～ホントに水希君にそつくりだ！－」

「水希つて・・お母さんのことですか？」

「ああそうさ！結婚式で見て以来だけど、そのままだな～。きっと

君も美人になるぞ！」

見たことも無い男の人だし、髪がぼさぼさで年も分からぬいけど、

「カッて笑った時の顔かす」ぐ……懐かし

と突拍子も無いことを言い出した。

- 10 -

思わず「」の場にいた全員がそう言つた。

止めどけ！お前なんかは子供が育てられるはずか無い！」

そんなに信用されてないんだこの人・・・と思いつつカリジトツと

した目で見てしまった。

が引き取るつて決めたんだ!!!

今、この人も何だか雰囲気が変わったけど、場の雰囲気も変わった
気がする。・・・すごい！この人の一言でこんなにも変わってしまった。
うなんて・・・こんな人だとは思わなかつた。

「つてことで」

コツと私に向かって微笑んだ。

—
^
{
}
!
?

店の人も親戚一同も全員呆然と見送
つていた。

「これからよろしくね、波音ちゃん？」

「またアノ、人を小馬鹿にした様な笑顔で言う。
『それよりちーー加減弘の二ヒ難 してくれまサ

「それよりもしもいし加洞私の」「と離してくわません?」

Leaf 1 出会いのかから（後書き）

あ～もうちょっとハチャメチャにするつもりだったんですけど……あまりなってませんね。でもこの小説のギャグ要因が出て来てくれたので、これからはきっと明るくなるかと……何はともあれ楽しんで読んで頂ければ幸いです。

Leaf2 太陽がいっぱい

太陽の大切さ、気づいていましたか？

「美味しいか？」

・・・・10回目。

「美味そうだよな～！」

・・・・5回目。

「あ～俺の事は気にしなくていいぞ！全然腹なんか減つてないから

！！」

そう言って、直後にお腹がなること・・・・3回目。

彼は私を連れ去り、真っ赤な車（お前車の名前ぐらい見ただけで分かれよ。赤の車つつたらアルファロメオ以外有り得ないだろ？と彼に誇らしげに言われた）にポンッと人を放り投げフルスピードで逃げ出した。あまりにあつという間の出来事だったので、私は自分が何処まで連れて行かれたのかすらも分からなかつた。そんな呆然としている私に、彼は何事も無かつたかの様に

「やっぱりまずは腹ごしらえだよな？」

と笑い掛け、きょろきょろしながら手頃なファミレスを探し始めた。お願いだから前を向いて運転して下さい・・・・

そうしてひげもじゃの男と、礼服を着た女の子という奇妙な組み合わせの二人組が、このレストランに来店したのだ。最初に彼は私に

「何が食べたい？何でも好きな物奢つてやるぞ？」

と聞いてきた。私はたいして食欲がなかつたので

「あ～、じゃあコーヒーを・・・・

と言つたのに

「何だ？その年でコーヒーか？んな大人ぶるなつて…何でも頼んで

「いいって言つたんだから、何でも頼めよ！」

お姉ちゃん注文よろしくと堂々と大声で叫んで、お客様の目をすべてこちらに向けてから彼はケーキ・パフェ・パイ・アイスクリム・・・など私が頼んでもない品を次々に注文した。こんなたくさん注文しといて払うお金が、このみすぼらしい格好の何処にあるのだろう？と私を初め、このレストランにいるお客様や店員さんの全員が思ったことだろう。あと結局彼はコーヒーを頼んではくれず、りんごジュースを頼んでいた。

私が疑いの表情でジトツと彼を見ていると
「なんだ？金ならあるから心配すんなつて！」
と少し誇らしげに言われ、

「ホラッ！」

とテーブルには札束が放り出された。福澤諭吉が一枚、一枚、三枚・・・もう数えられないくらい大量にあつた。私は目を見開き、驚いた。こんなもの見たのは初めてだつたし、こんな人がこんな大金を持つているという事にも驚きだつたからだ。・・・何故だか納得がいかない感が残る・・・そしてこの後、注文された品全てが私の為の物だという事に・・・この時はまだ気がついていなかつた。

だがこんなにもお腹を空かし今にも涎を垂らしそうになつている人を目の前にして、食事が出来るほど私は神経図太くない。

「あの～・・・これどうぞ」

私は近くにあつたイチゴのパフェを彼に差し出した。

「いや・・・だから俺はいらねえつて・・・グキュルルルルル

「・・・・お腹、鳴つてますけど・・・？」

あつ、顔が少し赤くなつてている。ちょっとしてやつたり。

「・・・コホン・・・じゃあ・・お言葉に甘えて・・・頂くとするかな」

そう言つやいなやにゅっと手が伸びてきて、一息にぺろりと食べてしまつた。そしてそれを皮切りに、次々に彼はテーブルに並ぶ

品々をあつといつ間に食べ尽くした。

「あ～腹いっぱい」

一緒にげっぷもしていた。本当にこの人が大人だとはとてもじゃないが思えない・・・地が髪面な上に、サングラス、外では帽子まで被っていたのだから正確な年齢は元々分かつていなかつたが・・・まあ、私が食事をしている最中にず～と笑いながら見ていく時の顔は、悪戯好きの悪ガキの様でもあつた・・・けど、どつちかつていうと・・・温かみを帯びた柔らかい眼差しで・・・まるで・・・「よし！腹！」しらえも済んだけど・・・ってさつきから口元に皺寄つてるぞ？」

そう眉間を指で擦りながら言われた。

「えっ！？」

「な～んかさつきからずつと考え込んでるよつだけど？」

私はあまりの呆れと、怒りで一瞬我を忘れ・・・

「それはあなたせいですよ！？」

と気づけば自分でも不思議なくらい大声で、しかも立ち上がりながらそう叫んでいた。客も店員もみんな、私のことを目をまん丸くして見ていた。かあっと顔が一気に赤くなつていつた。わ、私としたことが・・・こんなことぐらいで取り乱すなんて・・・

「ガアッはつはつはつはつはつ！」

目の前では大笑いされるし・・・もう・・・穴があつたらどうまでも潜り続けたい。

「や～つぱりお前は夏流の子だー。慌てると自分を見失うト」「とかそつくり」

「・・・夏流つて・・・まさか・・・お父さん・・・？」

「あー やつぱ知らなかつた！？俺、君のオジサンなの。夏流の弟」
そんなビックリどつきり発言急に言われても・・・お父さんだつてそんな事一言も言つてなかつたし。

「・・・じゃあ・・・何で・・・ちゃんとお葬式に出てくれなかつた

の？」

自分の兄が死んだって言つのに、どうしてそんな平氣な顔して……

「ああ・・それはホントにすまなかつたと思ってる」

珍しく声のトーンが下がつた。

「あいつが・・・夏流が死んだって新聞で見たんだけど、仕事が中々終わらんなくつてよ・・・ホント悪かつた。お前だけに辛い思いさせちまつて」

この人は信じれる。根拠も何も無いけど、私は直感的にそう思つた。見た目も大金を持つてる辺りも怪しいけど・・・この人は強い何かを持つっている。私が持つていない何かを。

「まあ、この俺が傍にいればもう辛い思いなんてさせねえから！安心しな！」

さつきとは打つて変わつて明るい声と笑顔。私には到底真似できない。

「俺達は今から『家族』だ！..」

そう言つて呆気にとられている私に、手を差し出した。

「・・・かぞ、く？」

「ああ！これからは一緒に住んで、一緒に食べて、一緒に暮らすんだ。辛い事も、哀しい事も、もちろん楽しい事もぜーんぶ分かり合える『家族』になるんだ」

思わず涙が零れて來た。一瞬にして失つたものを・・・もう手に入れられないと思っていた大切なものが、また与えられるなんて。私は感謝の気持ちを込めて、差し伸べられた手を強く掴み、握手をした。

「だ、大丈夫か？」

私が急に泣き出してびっくりしたらしい。

「ええ。ありがとうございます」

「んな堅苦しい事言うなつて！もう俺達は家族なんだから」

しかも照れてる。すぐに顔と態度に出でてしまつみたいだ。この人だつてお父さんとそつくりじゃない。

私達はお会計を済ませてレストランの、快晴の空が広がる外に出た。外がこんなに晴れていたなんて、今まで全然気がつかなかつた。私の心が曇つていたからかな？でももう大丈夫！太陽が現れたから。

「そりいえば・・・私はあなたの事をなんと呼べばいいんですか？」

「この人が私の父親だとは・・・正直あまり思いたくない。

「あ～・・・そりだな・・・キャブテンって呼べ！キャブテンがいい

！！」

・・・はい！？

Leaf2 太陽がいっぱい（後書き）

主要キャラが全員出るまで結構かかりますね、この話（笑）しかも主人公の人格が未だにきちんと定まっていないという・・・でも皆様に楽しんで読んで頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4160a/>

CLOVER

2010年10月28日06時54分発行